

友達

ここ数年若いころに知り合って友達になった人たちに無性に会いたくなってアメリカへ、イギリスへ、オーストラリアへと出かけて行った。皆自宅に滞在をするように進めてくれるので、お言葉に甘えた。学校時代の同級生は25年ぶり。容貌は変化していたが、性格も、話し方も前と同じで、まるでつい昨日話をしてたのの続きのように話がはずむ。何もかくしだてせず、つくろいもしない、若い頃の無鉄砲な時のそのままの友達だった。楽しくて時があつという間に過ぎて行った。

「また来るね」と別れる時に言ったのを3年後に実行することになった。

今回の渡米で前回会えなかった友達に連絡し、今度会わなかったら次はないぞ、と脅かしたら、飛行機で2時間もかかるのに滞在先の町に来てくれることになった。彼女とも20年以上会っていない。テレビ電話で話しているとやはり時の経過を忘れる。

友達と楽しくおしゃべりしていて考えた。そもそも友達ってどういう人達のことを言うのだろうか。友達になった経緯も思い出しながら考えて見た。

知り合った経緯はいろいろあったが、共通項は一目で、というか一回目にもう親しくなれたこと。これはきっと波長が合うということだと思う。

次に、何でもかくしだてしないで話せるかどうか。それも双方がそうかどうか。信頼関係が築かれていて裏切られる心配がなくて、安心して話せる人が友達。

次に勿論一緒にいて楽しい。これはどちらかが失意の時も含めて、励ましたり、慰めたり、いや何もしなくてもただ一緒に寄りそってくれていることで心が安らぐということ。無意識にでも気を使って、どこかで張り合ったりして、後で疲れるようなら安らぎではない。

最後に本当の友達と知人とを分ける決め手は、困った時、辛い時に遠慮しないで助けて欲しいと頼めるかどうか。そこで困った時に助けてくれた友達のことを思い出してみた。この場合、実際に費用と時間と労力とがかかるような助けであって、一言の助言や慰めの言葉のようなものは含まない。

何人かの顔がすぐに浮かんでくる。中にはもう会えなくなった人もいる。その人達のことを思うと顔と声と仕草がイメージとして浮かんでくる。一緒にいなくとも思い出だけでも懐かしく、心が豊かになるのを実感する。その人達全員の顔を思い浮かべながら、共通項は何かと考えて発見したのは、

嘘つきがない

ということだった。誰か他の人にはもしかしたら嘘を言ったかもしれないが、私に嘘をついた人はいない（多分他の人にも嘘はつかない人たちとは思うが）。

だから胸がスカッとするのだ。信頼できるのだ。

納得。正直な人を友達として天がめぐり合わせてくれたのかもしれない、と今度は感謝。

友達、ともだち、フレンド、日本人、アメリカ人、イギリス人。自分で家族を作らなかった私にとって、彼らが家族と言えらると思う。アメリカの友人 3 人はその家族も含めての友達で、一人ぼっちの私を家族の一員として迎えてくれた。この思い出が胸の中のアルバムになかったら今頃は生きていなかったかもしれないと思う。何回か死にかけるような経験をしてそれでも生き延びて来た私だが、まだ死んではいけないと思った心の底に、今度は私が誰かの、いや、もっと多くの人々の心の支えになるようなことを実践して、それから目を瞑りたいと思う。

それからここが一番大事なことで、これを皆さんにもお伝えしたいためにこの文を書いたようなものです。

本当の友達が欲しかったら正直な人になってください。

2013.5.18